

新約聖書 ルカによる福音書 16 章 1 節—13 節（新共同訳）

¹ イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。²そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』³管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。⁴そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』⁵そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。⁶『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』⁷また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』⁸主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。⁹そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。¹⁰ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。¹¹だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。¹²また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。¹³どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「土を掘る力」

本日の福音書の「不正な管理人」のたとえ話は、どことなくユーモアを感じさせられるものだと思います。ユーモアは、日々の生活において、人生において、大きな心の糧になるものです。

「インド独立の父」と言われるマハトマ・ガンジーはこのような言葉を残しています。「もし、私にユーモアがなければ、これほど長く苦しい戦いには耐えられなかったでしょう」。

またケン・ブランチャードという人は、「物事のユーモラスな面に目を向けると、人はどんな苦難も切り抜けることができます」と言いました。

たしかに、同じ状況の中にいる時でも、そこにユーモアを見ると、そうでないのでは、全然違う世界になると思います。

ユーモアはまた、人や物事に対して寛大な心持ちになれる潤滑剤です。

普通の視点で捉えれば、腹立たしく悲惨なことばかりが自分の身に起こっている状況を、深刻さや悲壮感だけで捉えるのではなく、漫画か何かのようなユーモアをもった視点で捉えれば、かなりその出来事の印象は変わってくるでしょう。

ユーモアには、もう死んだ方がマシだと思っていた自分が、もっと生きてみようかと思えるくらいの力があるのだと思います。

本日の福音書は、イエスが「不正な管理人」のたとえを語った箇所です。このたとえ話は、解釈が難しい聖書箇所の一つです。なぜなら、不正なことをした管理人が主人からほめられる話だからです。

主人の財産を管理していた男が不正を働き、不正を指摘されても悔い改めず、不正をさらにエスカレートさせました。

8 節には、主人が管理人の「抜け目のないやり方をほめた」とあります。抜け目のないやり方とは、まだ管理人として力を行使できる間に、主人に借りがある人々の借財を勝手に減らすということでした。

管理人が主人の貸しを勝手に減らすことは、そもそも管理人が問題視された「主人の財産を無駄遣いしている」ことの繰り返しになります（ルカ 16:1）。

なぜ、このたとえはイエスの「ほめた」という言葉で終わるのでしょうか（8 節）。イエスの不正な管理人に対する判断は、断罪ではなく、無条件の肯定であるように聞こえます。

イエスは、この不正な管理人を、ユーモアをもって肯定したのだと思います。

全く世俗的にふるまう管理人の行いの目的は、自分の生活を守るためでした。そのために友達を作ろうとしたのです。金持ちの主人のところを追い出されても自分の行き場があるように、管理人は全力を尽くして友達を作ろうとします。動機がどうであれ、そのために行動した管理人をイエスは温かく見守っています。そして「不正にまみれた富で友達を作りなさい」と言われます（ルカ 16:9）。

ここで「不正にまみれた富」と呼ばれているものは、「不正な手段で得た財産」のことではありません。これは、「この世の富」「この地上で得た財産」のことを指します。私たちが「富」とか「財産」と聞いたとき、普通にイメージするものです。

ですから、この「不正にまみれた富で友達を作りなさい」とは、「この世の富で友達を作りなさい」と言い換えることができます。

この世の富は永遠には続きません。たとえ死んだ後に莫大な遺産を残せるほどの大金持ちであっても、本人は、死後の世界までその財産を持っていくことはできません。

そんな「この世の富」を使って人を助け、心の友を作ることで、金がなくなっても、永遠の住まい——神の国へ迎え入れてもらえるとイエスは言っているのではないのでしょうか。

さて、今年も9月に入り、少し涼しくなってきました。

肉体をもつての地上での生は、誰もがいつの日か終わりを迎えます。死を目前にした方々の身体的苦痛や精神的苦痛を和らげる目的で作られた施設のことをホスピスと言います。

ホスピスでは、病気を治療するのではなく、病気によって引き起こされる苦痛を和らげる治療やケアを行います。

アルフォンス・デーケンという人は「諸外国のホスピスに共通しているのは、末期患者さんのケアに当る人たちが、いつも実に明るくユーモアたっぷりなことです」と言いました。

人を笑わせるようなユーモアを言うことは、技術もいり、全ての人ができることではないと思いますが、ユーモアの感覚をもつということは、意識すれば誰にでもできることだと思います。

そしてユーモアは、生と死の境界線を超えて、あらゆる恐れや不安を取り去ってくれるものではないのでしょうか。

本日の福音書の「不正な管理人のたとえ」は、真面目に解釈をしようとするとなかなか難しい箇所です。

この、自分が生き延びるために、なりふり構わず必死で行動した不正な管理人のたとえ話は、ユーモアをもって読み、アッハッハと笑って、自分も生きる元気が湧いてきたという感じになれば、それで良いのかもしれません。

私たちは、人生において万事休すという苦しい経験をすることがあるかもしれません。

ですが、どのような状況においても、ユーモアと朗らかさを忘れずにいることが、困難を乗り越え、人生を豊かにしていく力となるでしょう。

私たちは、日々、生かされていることを覚えながら、神の愛のもとに、希望と喜びをもって共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。あなたは、私たちの心をほぐし、生きるための知恵を与えてくださいます。私たちや、困難を抱える人が生と向き合っていくために、あなたが砦・逃れ場となってください。御子イエス・キリストによって祈ります。
アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 アモス書 8 章 4 節—7 節（新共同訳）

⁴ このことを聞け。貧しい者を踏みつけ／苦しむ農民を押さえつける者たちよ。

⁵ お前たちは言う。「新月祭はいつ終わるのか、穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。⁶ 弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう。」

⁷ 主はヤコブの誇りにかけて誓われる。「わたしは、彼らが行ったすべてのことを／いつまでも忘れない。」

新約聖書 テモテへの手紙— 2 章 1 節—7 節（新共同訳）

¹ そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。² 王たちやすべての高官のためにもささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穏で落ち着いた生活を送るためです。³ これは、わたしたちの救い主である神の御前に良いことであり、喜ばれることです。⁴ 神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。⁵ 神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。⁶ この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。これは定められた時になされた証しです。⁷ わたしは、その証しのために宣教者また使徒として、すなわち異邦人に信仰と真理を説く教師として任命されたのです。わたしは真実を語っており、偽りは言っていない。

教会讃美歌 151 番「ひとの目には」、238 番「いのちのかて」、320 番「しあわせなことよ」。